

リニア南アルプストンネル静岡工区を巡る状況 ～「静岡県問題」の理解のために～

当地域の各地で進められているリニア中央新幹線並びに関連事業。リニア開通への期待が寄せられるとともに注目されているのが静岡県内の動向。今回は静岡県のリニア新幹線を巡る問題を整理し、理解をいただくこととする。

紙幅の都合上、ここ最近の動向が中心となる。また遠隔地で直接の取材は難しく、限られた情報からのまとめにならざるを得ない。



静岡市 駿河湾と富士山

1. 静岡県内の問題点

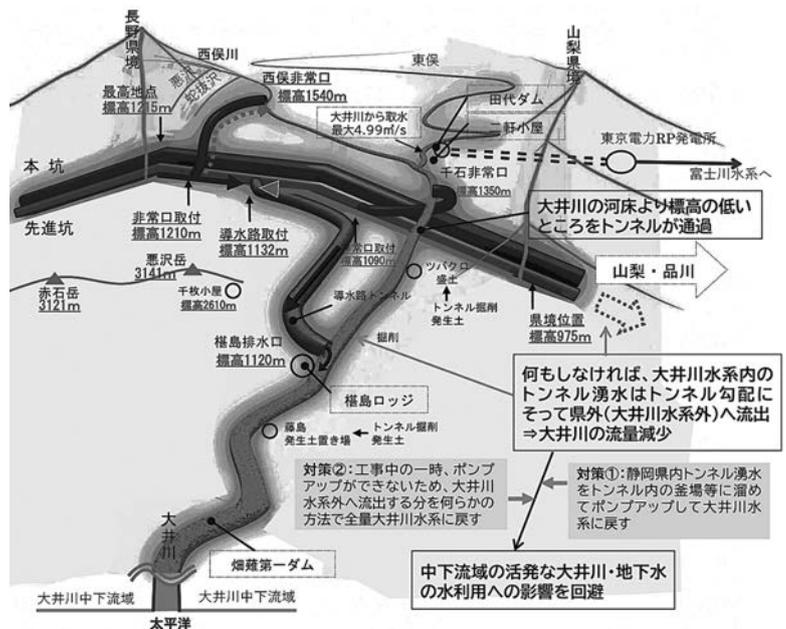
リニア南アルプストンネル静岡工区の問題は①大井川の水資源、②南アルプスの環境（生物多様性への影響）、③発生土による環境への影響であると指摘されている（静岡県HP「静岡県が懸念すること」）。

①大井川の水資源問題は、ほぼ決着がついたといえる。当初JR東海は平成25年環境アセスメントにおいて、トンネル工事により大井川の水が最大2t/秒減少すると発表して問題化した。これについて、後にJR東海は全量戻しを表明。ただ、トンネル掘削は上り勾配で掘り進むため（下図参照）、湧水は山梨県境へ向けて流れる。山梨県境まで流れた水はポンプアップし、導水路トンネルで大井川へ戻すが、掘削中（トンネル貫通の前）は山梨県側に水が流失する期間が出来てしまう。

令和4年4月JR東海は、その間の大井川への水の補填を東京電力が田代ダムから発電のため山梨県に引水する水の一部を大井川に戻す案を提案。静岡県（知事）との応酬があったものの、JR案で進めることとなった。

山梨県側から掘削中のトンネルは山梨・静岡県境に差し掛かり、県境付近の地質調査のためのボーリング（先進長尺ボーリング）を予定するも、静岡県は、県境付近の水が山梨県へ流れるとして実施を認めていない。

「トンネル工事の位置と大井川の関係」



2. トンネル工事と南アルプスへの影響

②南アルプスの環境は、トンネル掘削による南アルプスの植生や生物の生息環境への影響を問題としたもので、具体的には、トンネル掘削の湧水発生により地下水位低下で沢の水が減少することや高山帯の土壌水分量が減少すると危惧されている。

国交省は令和2年4月から有識者会議を開催し検討してきた。令和3年12月に有識者会議は中間報告（内容は①大井川の水資源について）を発表。そして令和5年12月「リニア中央新幹線静岡工区に関する報告書～環境保全に関する検討～」(以下報告書)が発表された。

静岡市資料「国交省有識者会議報告の概要とそれについての静岡市の見解等」2頁
(静岡県作成、静岡市が加筆)

報告は多岐にわたっているが、まず流域の沢の流量変化は、断層とトンネルが交錯する箇所周辺の沢において流量が減少する傾向が確認されるが、その他の沢については流量変化の傾向は確認されず、トンネルと交差する箇所には薬液注入によりその他の沢の流量減少を低減する効果が期待されることが確認された、としている。

また高標高部の植生等への影響については、植生への主な供給経路は地下深部の地下水ではなく植生に影響は及ばないとしている。また、高標高部の池の水は深部の地下水とは直接的には繋がっておらず、トンネル掘削により地下水位が低下しても影響はないとする(同)。いずれも、事前のモニタリングと影響予測の・評価ヘフィードバックと必要な対策実施が基本、とまとめている。

令和5年4月静岡市長に元県副知事の難波喬司氏が当選した。新市長の下で静岡市は国有識者会議に対して地下水位低下のシミュレーションでの静岡市モデル(GETFLOWS)を提言するなど積極的に関わっている。「水が減った後では間に合わない」(市長ブリーフィング資料)として、「保全措置の変更・修正」のPDCAを繰り返すことが重要」(「国交省有識者会議報告の概要とそれについての静岡市の見解等」)としている。

3. 発生土・盛り土に対する懸念と対応

③発生土による環境への影響について、トンネル掘削で出る発生土の置き場は、主に「ツバクロ」「藤島」に設置される(前頁図参照)。このうち、ツバクロ発生土置き場について県は、周辺の大規模山体崩壊の発生やそれによる天然ダムの形成とその後の決壊による下流へのリスクがあり、ここに盛り土は認められないとしている。また、盛り土による河川の水質汚濁や盛り土に含まれる重金属の環境への拡散なども指摘されている。

令和5年12月静岡市が見解を示し、山体崩壊について、残土盛り土のあり・なしの条件でのリスクをそれぞれ検討し、必ずしも残土が被害を拡大するとはいえないとし、難波市長は、山体崩壊を懸念するのであれば河川管理者である静岡県が独自に山体崩壊のリスクを想定・評価して対策を進める責任があり、JR東海のみ責任とするものでないことも指摘している。

4. 静岡県内の変化

このように水資源問題や南アルプスの環境問題について、難波静岡市長は国有識者会議等に対し積極的に発言してきたが、現状をアルプス環境問題では「8合目」、ツバクロ残土置き場問題では「9合目」とかなり進んでいるとの認識を示している(本年1月13日 朝日新聞デジタル)。

また2月26日行われたJR東海と大井川流域10市町との会合で、前述の調査ボーリングについて、「田代ダムは大規模改修により取水が来年11月までストップしている。全量大井川へ水が流れているこの間に調査ボーリングの実施を」という意見が出されているが、これに対し川勝知事は現状許可しない考えを示した(静岡朝日テレビニュース)。

静岡県内の力関係は僅かずつであるが変化してきており、事態は前進に向けてそろそろ動き出しているように見える。

<参照>

国土交通省 HP リニア中央新幹線について

https://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk9_000035.html

静岡県 HP リニア中央新幹線整備工事に伴う環境への影響に関する対応

<https://www.pref.shizuoka.jp/kurashikankyo/kankyo/1040554/1002001/index.html>

静岡市 HP

<https://www.city.shizuoka.lg.jp/>



大井川支流西俣川の斜坑掘削ヤード予定地
(撮影：赤羽目壮人)

(飯田信用金庫 地域サポート部 リニア対策課 加藤 修平)